

北海道スタンダード研究委員会 第8回勉強会 歴史に学び、北海道の未来を考える

技術士(建設/総合技術監理部門)
北海道スタンダード研究委員会 副代表 正岡久明

1. はじめに

「歴史に学び、北海道の未来を考える」をテーマとして、石塚教授をお招きして二部構成で勉強会を行いました。参加者にとって初めて知る内容が多くとても興味深く、示唆に富む素晴らしいご講演をいただきました。



図-1 石塚耕一教授

- テーマ：歴史に学び、北海道の未来を考える
 - 第一部 夷酋列像と北海道
 - 第二部 文化が人を育て 街を活性化させる
- 講師：石塚耕一教授
東海大学国際文化学部デザイン文化学科
- 日時：平成26年6月6日(金)
18:00～20:20
- 場所：札幌きょうさいサロン(参加者25名)
ここでは石塚教授の講演内容をご紹介します。

第一部 夷酋列像と北海道

(1) 幻の名画がフランスで発見された！

1984年、フランスのブザンソン美術館で蠣崎波響かきざきはきょうが描いた「夷酋列像いしゅうれつぞう」11点が発見され、北海道新聞が一面にスクープ記事として掲載したことで、

美術界や歴史研究者が騒然となった。

(2) 225年前 北海道で起こった戦い

1789年、国後島とメナシのアイヌが和人商人の酷使に耐えかねて蜂起し、現地にいた70人余りの和人を殺害した。これがクナシリ・メナシの戦いである。事件を受けた松前藩は、260名の討伐隊を派遣して戦いを鎮圧した。1789年はフランス革命が起こった年であり、蝦夷地でこのような戦いが起こったことは忘れてはならない歴史である。

(3) 蠣崎波響かきざきはきょうと夷酋列像いしゅうれつぞう

蠣崎波響は、松前藩第12代藩主 松前資広の五男に生まれ、幼い頃から画を好み、10歳で江戸に上がって南蘋派の画家に絵を学び、20歳の時、松前に戻る。26歳の時、クナシリ・メナシの戦い(1789年)において討伐隊の指揮官の一人として波響も参加。戦い鎮圧後、松前藩に協力し最も功労があると認められたアイヌ指導者らを松前に呼び凱旋パレードを行った。この時、波響は藩主からの命を受けて、12名のアイヌ指導者の肖像画を描いた。これが夷酋列像であり、後に波響の代表作となる

(4) 天覧に供した夷酋列像

藩主は幕府に対して「松前藩はアイヌを制圧して指導していますのでご安心下さい。」というメッセージを伝えるために波響に「夷酋列像」を描かせた。

1791年、波響は「夷酋列像」を携え上洛。京都で話題になり天皇陛下にもお見せすることになる。

そして江戸でも大評判になり江戸幕府に献上した。

波響の画力によるこの絵が大評判となって天覧に供し、幕府献上に献上したことで、藩主の政治的目的は、予想を遥かに超える成果を挙げたと言える。

(5)クナシリの酋長ツキノエ

ツキノエはすごく体格が良く、そして面倒見が良く、存在感があって、とても大きな存在だったようだ。ツキノエはロシアとも交流をしていたようである。ロシアが北海道の方に下がってきて千島列島を通じて交易に来る時、一目置いていたのがこのツキノエである。

波響もツキノエを描くにあたって最もゴージャスな迫力のある蝦夷錦を着せて存在感を強調している。このように存在感のあるアイヌ指導者を制圧している、ということを伝えることが、松前藩が幕府の不信感を打破するひとつの方策だったと考えられる。



図-2 夷酋列像『ツキノエ』

(6)なぜ怖い目を描いたのか？

藩主は江戸幕府に対して、松前藩はアイヌを制圧して、しっかり指導しているということを伝えるために波響に夷酋列像を描かせた。そうした意図があるのにも関わらず、なぜ波響はアイヌ指導者をこのような怖い目つきにする必要があったのか。夷酋列像の「目」に込められた想いを考えると不思議な気持ちになる。

もしアイヌ民族を服従させた証としての絵であれば、ここまで怖い目にしないはずである。例えば、

私はこう考える。波響はアイヌの絵を描いていくうちにアイヌの指導者の気持ちがだんだんわかるようになって、そしてアイヌの皆さん方の怒り、そういったものを最終的にこの目で表現したのではないかと、思ったりしている。

(7)宇宙のような作品

夷酋列像の実物の大きさは A3 サイズの小さな作品であるにもかかわらず、それを大きく見せているのは、細部に至るまで丁寧に描かれた描写力と巧妙なデフォルメにあり、それが強烈な存在感をつくり出している。



図-3 ブザンソン美術館での対面



図-4 夷酋列像『シモチ』

世界の中でこれほど迫力があって、繊細、緻密で見ただけで何か伝わってくる絵、なにか力強い怨念のようなものを感じる絵は恐らく他にはないと思う。この絵はモナリザにも匹敵する「一度見たら忘れない」インパクトを持っている。だからこそ幻の名画と呼ばれているのかもしれない。



ツキノエ(クナシリの総指導者)

- 夷酋列像 12 点の中で、威風堂々としていて印象に強く残るツキノエ。国後(クナシリ)の総部酋長だったツキノエはアイヌの英雄であり、優れた統制力を持っていたとされる。
- この作品の最大の魅力は、ツキノエのリーダーとしての威厳が描き出されていることにある。それを象徴するのが髭であり、堂々とした表情にある。1本1本丁寧に描かれた髪の毛や髭は作品のリアリティを高め、構図なども巧妙に練られている。
- 夷酋列像は、世界の美術史を見ても他にはない個性、写実力、そして装飾的な美しさがあり、いまこそ再評価されるべきである。



シモチ(アッケシの準指導者)



ノチクサ(シャモコタンの指導者)



ニシコマケ(アッケシの指導者)



ションコ(ノッカマップの指導者)

(8)絵はどうしてフランスに渡ったのか？

絵がフランスに渡った経緯については諸説あるが、今のところ私が有力としている説はメルメカシオン説である。メルメカシオンは、宣教師で函館の初代元町カトリックの神父であるが、函館でアイヌの研究もしていて、函館の人から高額な贈りものを受け取っている。その時に夷酋列像をもらった可能性がある。しかも彼はブザンソンの出身である。

(9)北海道の財産が 222 年ぶりに松前城へ里帰り！

松前高校の校長の時、国際教育の一環でフランスを訪れた際(2010年10月)、私はブザンソンの副市長に「夷酋列像を返して下さい。この絵は北海道の財産であり、日本の宝であり、何より松前町にこの絵が戻って来たら町の活性化に役立つ。フランスにあたってブザンソン美術館の引き出しの箱の中に入っているだけで、展示してないじゃないですか。それだったら返して下さい。お願いします。」とはっきり言った。そしたら副市長が「わかりました。返す方向で検討します。」と言って下さった。

世の中は何が起こるか本当にわからないもので、夷酋列像が松前町に 222 年ぶりにたった 1 日だけ帰って来た(2012年7月23日)。

(10)隠された謎はまだ多い！

- ・本当はだれがフランスに持ち帰ったのか？
- ・発見されていない 1 枚はどこにあるのか？
- ・波響は 12 名全員と会っているのか？
- ・波響がこの絵に込めた本当の思いは何か？ 等

それにしても夷酋列像は人を惹きつけ、謎の多い絵である。

私が夷酋列像を研究するようになったきっかけは、松前高校の校長として 2 年間暮らした公宅が、実は蠣崎波響の波響楼があったところで、おそらく夷酋列像もそこで描かれたということを知ってからである。松前は風の強い土地で、強い風が吹くと風が何となく波響の声に聞こえ「おまえは夷酋列像をどうするつもりだ、もっと考えろ。」とされている気がして夢にまで出てくる。今、松前を離れてしまったが、これからも少しずつ研究を続ける所存である。

第二部 文化が人を育て 街を活性化させる

(1)音威子府高校

北海道で一番小さな村、音威子府の校長を 3 年間勤めた(当時まだ 50 歳で、全道一若い校長だった)。



図-5 道内で一番小さい村 音威子府の高校

音威子府高校(以下、音高)は、少ない時は 6 名しか生徒が入学しない時があった。私が校長になった時、最初に「あなたの仕事はとにかく生徒を集めること。そして学校を存続させること。」と言われた。

実は音高の教育はすごくレベルが高く、自信を持ちさえすればこの学校は化けると直感し、「自分達の教育に誇りを持とう。」「夢を語れる学校にしたい。」という思いを込めて学校経営方針を示した。

平成 20 年度 学校経営方針

北海道おといねっぶ美術工芸高等学校長 石塚耕一

〈生徒、保護者、村民、教職員が共に夢を語れる学校を創造する〉

夢を語れる学校づくり

〈描く、つくる、対話する〉

創造力を育成し人間力を高める

図-6 学校経営方針

音高の取り組みや生徒の活動が注目され、テレビで紹介されると生徒も村民も自信と誇りを持つようになった。NHK の新日本紀行の新シリーズで特集を組まれて有名になり、あっという間に全国から学生が、高校生が来るようになった。高校が有名になって私が 3 年目の時には一般受験の倍率がなんと 4.6 倍。考えられない数字になった。

最後、村長が「音威子府村の基幹産業は高校だ。」と言ってくれた。

(2) 松前高校

①豊かな歴史と文化を持つ町 松前

平成 21～22 年、松前高校の校長として勤務させていただいた。松前は本当に素晴らしい豊かな歴史と文化を持つ町である。



図-7 桜の時期の松前城

松前の春は江戸にもない、と言われたほど繁栄していた城下町松前。今、松前のマグロは築地市場で評価されている。それから観光資源として、とても美しい松前小島。文化人もたくさん出ている。

蠣崎波響。山口蓬春という日本画家の大家。小説家の伊藤整。漫画家の佐藤輝。それから松前にとって一番大切な金子鷗亭先生。漢字、かな交じりの書という、ひらがなと漢字を合わせる作品を生み出した書家。少し残念なのは地域の皆さんが、松前の良さに気づいてなく、少し元気がないことである。

②学校経営方針

松前高校は伝統があるものの生徒数が減少し、学力も低下。何より特色のない教育をやっていた。私は校長として2校目だから、学校経営をより明確に示した。学校経営方針の中心に据えたのは「松前学」。教育の中で松前の歴史、文化、産業を徹底的に学び、誇りを持つ。二つ目として書道教育を取り入れた。三つ目として、夷酋列像がブザンソン(フランス)にあるのでこれを上手く使って国際教育を掲げた。

学校経営方針に則り、教育の根幹部分から変える、そして外部にも積極的にPRを行い、地域住民も巻き込んだ取り組みを実践した。

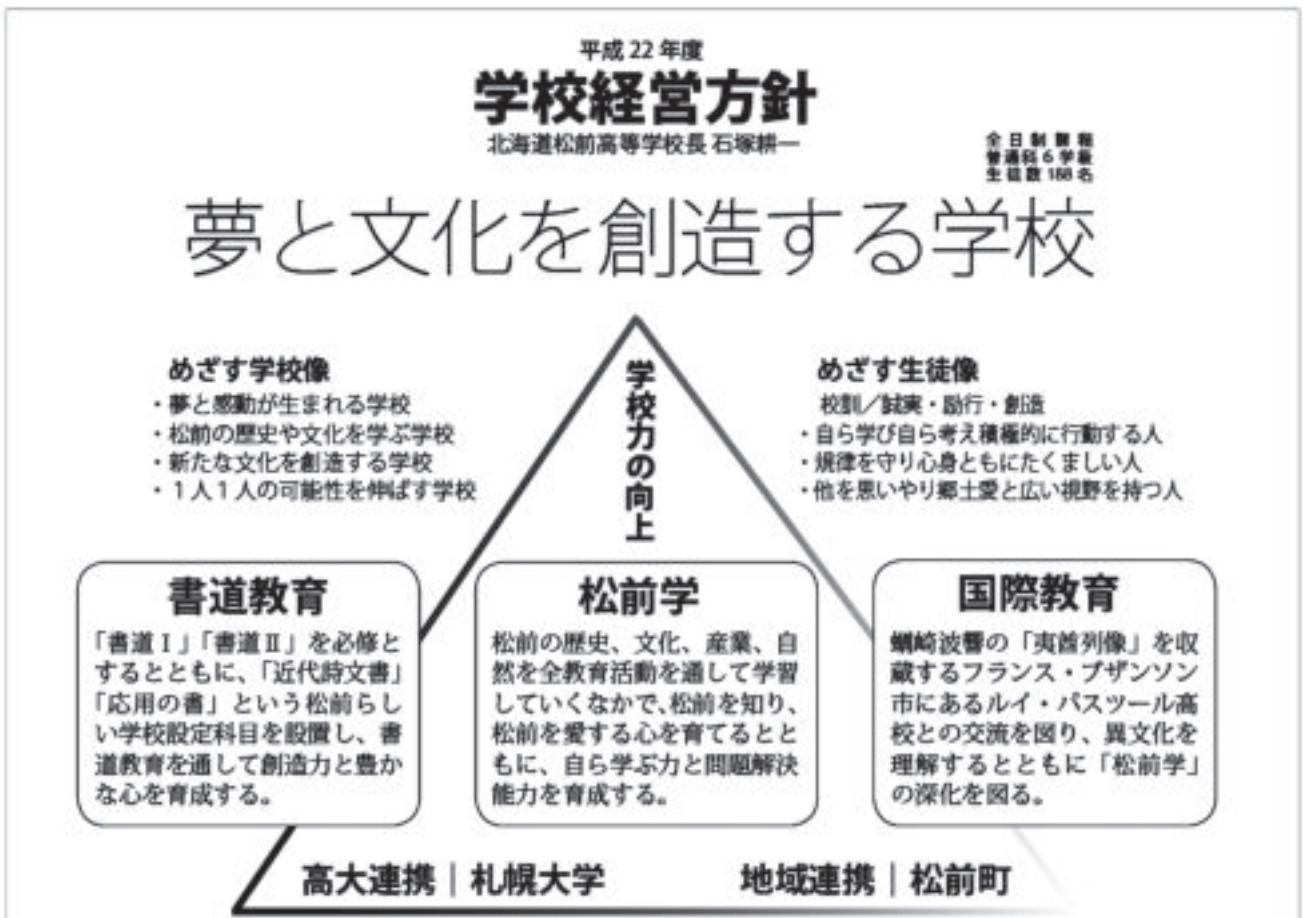


図-8 松前高校 学校経営方針

③国際教育

フランスで日本の漫画、アニメーション、建築などの日本文化がとても人気がある。今回の交流で学生が松前藩の格好をして書道をしたらとても喜んでくれた。彼らにとって書道はアートで、失敗した書道作品も全部欲しい、と言って持ち帰ってしまった。またブザンソン美術館で夷酋列像とも対面できた。



図-9 フランスでの国際交流を伝える北海道新聞記事

当初、松前町にフランスに行くと言ったら、「書道だから中国の方がいい。」と言っていたのが、今回の交流の成果を見て、「修学旅行でフランスに行ってもいい。それくらいのお金は出す。」と言ってくれた。これはすごい意識の変化で、皆さんが松前の文化と可能性に気づいて、それを誇りとして意識してくれた結果だと思う。

おわりに

(1) 講演を聴いて

石塚先生の講演 第一部では、夷酋列像の絵を通して蠣崎波響のことや松前の歴史、そして北海島の歴史の一端を教えてくださいました。ダヴィンチ・

コードならぬ波響・コードに興味がありません。

第二部で先生が言われた「校長として赴任した3つの地域(音威子府、松前、釧路)の中で、多くのことを教えていただき、そして地域が変わっていく場面を見せていただいたことに感謝している。」という言葉がとても印象に残っています。これは地域が頑張ったことは無論ですが、同時に石塚先生の着眼力、説得力、発信力、そして信念、情熱、行動力の賜物です。私たちが目指す「元気な北海道」に向けて、石塚先生がお話された多くの示唆を教訓にして、少しずつでも行動していきたいと思います。

(2) 素敵な出会い

石塚先生の著書「奇跡の学校」を読んで感動した横浜の技術士の方が、勉強会・意見交換会に参加してくれました。

今回の勉強会のことを日本技術士会 北海道本部のホームページで偶然知り、参加のために休暇を取って自費で参加したということで、先生とお会いしてお話できたことをとても喜んでいました。



『奇跡の学校』
おといねっぶの森から

(3) 追伸

本文では夷酋列像 12 人のうち、紙面の関係から 5 人しか紹介できませんでしたが、松前城の最上階で 12 人の複製を見ることができます。松前に行く機会があればぜひご覧ください。

本文で使用している写真は、全て石塚先生が撮影された写真です(図-1 除く)。

参考文献

石塚教授ブログ 学びの森 manabinomo.exblog.jp

正岡久明 (まさおか ひさあき)

技術士(建設/総合技術監理部門)

北海道スタンダード研究会 副代表
株式会社シー・イー・サービス、
e-mail:masaoka.h@ces.co.jp

